

称号及び氏名	博士（人間科学） 長濱 一真
学位授与の日付	平成26年3月31日
論文名	「哀悼遊戯と星座——ベンヤミン 『ドイツ哀悼遊戯の根源』の総体的な構成を巡る考察
論文審査委員	主査 細見 和之 副査 森岡 正博 副査 酒井 隆史

要旨

本論文はヴァルター・ベンヤミン **Walter Benjamin** の『ドイツ哀悼遊戯の根源 **Ursprung des deutschen Trauerspiels**』〔以下『根源』〕を総体的に把握することを試みる。すなわち、『根源』に登場する君主 - 殉教者とアレゴリカーとの関係を論述し、かつ、哀悼遊戯とアレゴリーの関係を論述することで、『根源』の第1部と第2部の関係について明らかにし、『根源』を総体的に把握することを試みる。

第1章「君主 - 殉教者」では、『根源』に登場する君主 **Fürst** かつ殉教者 **Märtyrer** という形象に焦点を置き、「(1) 決断する／決断できない君主」、「(2) 被造物としての殉教者」、「(3) 廷臣 - 陰謀家との関係における君主 - 殉教者」という3つの節をつうじて、『根源』における君主像を明確にする。ベンヤミンが強調する君主 - 殉教者は、使命と能力とのあいだの闘ぎあいを、そのあいだの緊張を解決することなく己のうちに抱え込み、しばしばそのことが決断力のない状態として露呈させたり、狂気に陥ったり死に至ったりする儚い被造物として提示されている。その際、君主 - 殉教者に使命を課す、超越とも呼ばれるものとの関係も重要である。限られたこの現世で、「強制の絆 **Joch dieses Zwanges**」として超越との関係を取り結び、みずからの運命を果たす者、それがベンヤミンの描く君主 - 殉教者である。

第2章「哀悼遊戯の舞台と自然 - 史」では、「(1) 哀悼遊戯の内在性」、「(2) 宮廷 - 身体 - 機械」、「(3) 自然 - 史」、「(4) 死後の生」、「(5) 運命的なもの——哀悼遊戯におけるエンテレケイア」、「(6) 幽霊あるいは狡猾な死者」という6つの節をつうじて、『根源』において君主 - 殉教者が置かれている舞台に焦点を置いて論述する。

君主 - 殉教者が哀悼遊戯 **Trauerspiel** を繰り広げる舞台をベンヤミンは自然史 **Naturgeschichte** と呼ぶ。これは自然 **Natur** と歴史 **Geschichte** の2語からなる言葉だが、それは、まさに君主 - 殉教者の生のあり様を、したがって哀悼遊戯のあり様を言い当てている。君主 - 殉教者が生きるこの現世は自然 **Natur** からなりながらも、いわゆる自然と人工との対立を超えた自然と捉えられている。それは超越に対して内在と

呼ばれる場であり、そこにあらゆる被造物は生きている。この自然に前史 **Vorgeschichte** が突発的に介入する。そのことによって自然に歴史がもたらされ、自然は自然史となる。そしてこの自然史を最も体現するのが君主 - 殉教者である。その使命とは、現世で自然史を演技 - 遊戯する **spielen** ことだといってよい。君主 - 殉教者は前史のよすがに触れて、そのまま前史を忠実に回帰させるのでも復古させるのでもなく、むしろ補綴する **restaurieren** のである。

前史は自然のなかに介入する際にはあくまでよすがとして現われるが、それは君主 - 殉教者には運命的なものとして現出する。ベンヤミンは運命的なもの形象を幾つか挙げている。一つは小道具類であり、君主の頭に嵌る王冠、短剣などの凶器など、哀悼劇の展開のなかで思わぬ効果をもって君主たちを翻弄させる諸事物を指す。二つ目は夢や預言であり、登場人物にまさに運命を、とりわけ死についての運命をしばしば告げ知らせるが、どれだけ利口な者もそれを認識しつくすことはできない。三つ目は幽霊であり、回帰不能なものの回帰を端的に担うものとして、重視される。例えば『ハムレット』における先王の幽霊のように、だれにも知られずにいた記憶の断片を君主役を担う者に告げ、被造物を翻弄し、ひいては宮廷に紛糾をもたらす。

運命的なものはどれも死にまつわるものであって、前史が運命的なものとなって現世に介入すると、その身体であり機械でもある宮廷 - 組織には死が訪れる。ベンヤミンは『根源』では被造物のからだだけでなく、複数の登場人物間の関係性も含めて機械と捉えるのだが、それに加えてそれが同時に身体でもあると捉えるのは、それに取り返しの効かない死が訪れることが踏まえられているからである。この自然への前史の介入、回帰不能なものの回帰が起こるとき、君主 - 殉教者を核とした宮廷は「死後の生 **Fortleben**」と化す。自然史を生きるとはしたがって、死後の生を生きることの謂いでもある。

第3章「メランコリカー」では、「(1) 悲しみなる精神と感情」、「(2) 『君主と廷臣』再論」という2つの節をつうじて、君主 - 殉教者が運命的なものとかかわり、彼らがメランコリカーとなり、沈思 - 熟考する者となる道筋を明らかにする。君主 - 殉教者は彼らを翻弄する運命的なものに意義 **Bedeutung** を付与し、捉えようとするが、それによって彼らはアレゴリカー **Allegoriker** となる。アレゴリカーとは、アレゴリーを行使する者であるだけでなく、みずからアレゴリカルになることを厭わない者を指している。運命的なものに翻弄され、衝動 - 感情に衝き動かされていた君主 - 殉教者たちは悲しみなる精神 **Trauergeist** を宿らせ - 身籠る **empfangen**。その悲しみなる精神が思考を要請することによって、君主 - 殉教者たちはアレゴリカーとなるのである。

第4章「『根源』の2部構成とその媒介について」では、「(1) 前景的なもの及び後景的なもの／本劇的なもの及び幕間劇的なもの」、「(2) エンブレム」という2つの節をつうじて、そもそも『根源』が2部構成である理由を明らかにするとともに、「エンブレム」に焦点を当てる。「悲しみなる精神」は運命的なものやそれに触発された衝動 - 感情がもたらしたものを、一つの文字象 **Schriftbild** もしくはエンブレム **Emblem** として捉え、その意義をひたむきに熟考する。それは、哀悼劇の構造でいえば、本劇に対する幕間劇 **Zwischenspiel** として哀悼遊戯にかかわる前史のよすかを、新たに補綴することであり、それこそがアレゴリーなのである。

第5章「アダムとイヴあるいは悲しみと愉悦」では、「(1) 〈アレゴリカルな故郷〉」、「(2) おどけるイヴ」という2つの節をつうじて、『根源』の第1部と第2部を繋ぐ重要な人物像としてアダムとイヴに焦点を当

てる。アレゴリカーとして自然史を生きるとは、前史を補綴しつつ生きることであり、死後の生として、言い換えれば哀悼 **Trauer** として、いまや歴史的となりつつあるものを読むことである。それはもともと自然には存在しないものを読むことであって、往々にして失敗する。その失敗の経験がアレゴリカーにとって〈アレゴリカルな故郷 **allegorische Heimat**〉となる。アレゴリカーはここでただ沈思 - 熟考だけする悲しみなる精神とは別の精神を宿す - 身籠ることになる。すなわち、おどけたる精神 **Spaßgeist** がそこで新たにアレゴリカーを規定するのだが、ベンヤミンはこの二つの精神にそれぞれ形象を、原像 **Urbild** を与えている。すなわち、悲しみなる精神はアダム、おどけなる精神はイヴによって具象化される、と語っているのである。

第 6 章『『言語一般及び人間の言語について』と哀悼遊戯』では、第 5 章で確認したアダムとイヴという原像を、『根源』に先立つ論考「言語一般及び人間の言語について」と関係づけて論じる。もちろん、『根源』においてアダムとイヴはそれぞれの精神のアレゴリーとして提示されている。このアダムとイヴの読解は、『根源』でも自己引用されているベンヤミンの「人間の言語及び言語一般について」〔以下「人間の言語」〕におけるアダムとイヴについての論述を補助線として為され、そこで人間の言語の核とされる名 **Name** と『根源』におけるアレゴリーとの関係も確認されている。快活なイヴはアダムのアレゴリーを判断 - 判決 **Urteil** する、悲しみにとっての幽霊のような存在として、アダムに連れ添い、哀悼 - 悲しみ **Trauer** を遊戯 **Spiel** に変える。それによって初めて、アレゴリーは、「人間の言語」で論述された名を毀損してしまった墮罪後の人間の言語を肯定するものとなる。アレゴリーは「人間の言語」において強調されていた「名」の、復古や再現ではなく、あくまで補綴なのである。

終章「『認識批判序説』をめぐる終章」では、「(1) はじめに」、「(2) 『序説』成立過程」、「(3) 啓示から星座へ」、「(4) 啓示」、「(5) 認識と概念」、「(6) 理念と諸々のエレメント」、「(7) 哀悼遊戯と星座」という 7 つの節をつうじて、『根源』の冒頭に置かれている「認識批判序説」（以下、「序説」）について、とくにその「序説」草稿と決定稿との比較にもとづく注釈を行う。『根源』における「序説」の草稿と決定稿とを読み比べることは、名とアレゴリーの関係をつまみ直すことに繋がり、そこで最も有名な星座 **Konstellation** なる理念を理解するのに役立つ。「人間の言語」においては啓示されるものだった名は『根源』においては星座として補綴される。星座の星々は「概念的な諸々のエレメント」であり、これらが理念のもとに「一回的な - 極端なもの **Einmalig-Extreme**」として、ひとつの星座をかたちづくる。もちろん、星座とはアレゴリーのアレゴリーにほかならない。

最後に「おわりに」において、本論文の以上の流れの全体を簡潔に総括している。

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会は、長濱一真氏による論文「哀悼遊戯と星座——ベンヤミン『ドイツ哀悼遊戯の根源』の総体的な構成を巡る考察」について、2014年1月23日、2月5日、2月6日の審議を経て、以下の審査結果を得たので報告する。なお、申請者は2013年3月31日に大阪府立大学大学院人間社会学研究科人間科学専攻を単位取得退学している。

本論文は、ヴァルター・ベンヤミンの主著『ドイツ哀悼遊戯の根源』を内在的に読み解き、従来は明確にされてこなかったその総体的な構成を独自の視点で明瞭に把握しようとするものである。とりわけ、『ドイツ哀悼遊戯の根源』が2部構成であることの意味を、第1部で主題的に論じられる「君主 - 殉教者」が第2部で主題化されるアレゴリーの担い手となるという形で、整合的に読み解きうることを示している。また、『ドイツ哀悼遊戯の根源』の序説を、その第一次草稿と決定稿を比較して、第一次草稿で重要な位置にあった「啓示 **Offenbarung**」の概念が決定稿では削除され、その代わりに「星座 **Konstellation**」という新たな概念が登場することを指摘し、その意味を考察している。

以下、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に従って、審査結果を詳述する。

審査基準1：研究テーマが絞り込まれている

本論文の基底的な問題意識は、難解なゆえにその全体像が十分に把握されてこなかったベンヤミンの『ドイツ哀悼遊戯の根源』を、徹底して内在的に読み解くことによって、その総体的な構成を明確にしようとするものである。その際、長濱氏は“**Naturgeschichte**”や“**Vorgeschichte**”といった、日常語でありながらきわめて特異な意味を付与されたベンヤミンの言葉に徹底して着目して、従来日本では「悲劇」と訳されてきたこの著作のタイトルにある“**Trauerspiel**”をも「哀悼遊戯」と原義に忠実に訳し、その意味を捉え返すことを提唱し、第1部の君主 - 殉教者像と第2部のアレゴリー論があわさって、それ自体ベンヤミンの「哀悼遊戯」が実践されている、と解釈する。ベンヤミンの関連著作はもとより、同時代のカール・シュミットらとの関係などに着目しつつも、本論文の眼目は『ドイツ哀悼遊戯の根源』の総体的な構成に関する考察に集中している。

このように長濱氏の研究テーマは一本の線に沿って明確に絞り込まれており、首尾一貫している。

審査基準2：論文の方法論が明確である

本論文の方法論は、難解なベンヤミンの著作に分け入って、とりわけ特異で多義的なベンヤミンの言葉をそのつど解きほぐしながら精読する、解釈学的な研究方法を基本とする。また、とくに終章においては、第一次草稿と決定稿の差異を丹念に読み解く、文献学的方法論にしたがっている。

このように、本論文における長濱氏の方法論は明確である。

審査基準3：研究テーマについての先行研究の調査を十分に行なっている

本論文の研究テーマの核心部分にあるのは、ベンヤミンの『ドイツ哀悼悲劇の根源』の総体的な構成はどうなっているのか、という問いである。この問いそのものを明確にしようと試みた先行研究はドイツ語圏においてもけっして多くはないが、この著作について部分的に論じた研究は内外に膨大に存在している。長濱氏は本論文の冒頭で、『ドイツ哀悼遊戯の根源』に関する内外の先行研究の変遷を、戦後ドイツにおけるベンヤミン研究のはじまりから、その後の内外の研究をふくめて、現在にいたるまで、丹念にたどっている。

このように、本論文において先行研究の調査は十分に行なわれている。

審査基準4：研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

長濱氏は、本論文の主題である『ドイツ哀悼遊戯の根源』のドイツ語原文、序説の第一次草稿はもとより、ベンヤミンの著作の大半を精読して、その内容を十分に吟味している。また長濱氏は、『ドイツ哀悼遊戯の根源』で扱われている、シェイクスピアやカルデロンをふくめたバロック悲劇、バロック悲劇の背景をなす17世紀のヨーロッパに関する文献、『ドイツ哀悼遊戯の根源』が書かれた前後の、思想・文化に関する膨大な文献を読み解いて、本論文における研究の背景としている。

このように、本論文において、研究の素材となる基本文献、資料、調査データは十分に吟味されている。

審査基準5：研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

本論文では主として以下の新しい知見が打ち出されている。

1) 本論文の最大の眼目は、ベンヤミン『ドイツ哀悼遊戯の根源』の総体的な構成を明確にすることである。その課題は、そもそも『ドイツ哀悼遊戯の根源』がベンヤミンの著作には珍しい2部構成であることに着目しつつ、第1部で描かれる君主-殉教者が第2部で論じられるアレゴリーの担い手となるという道筋を、錯綜した文章を読み解きながら浮き彫りにすることで、果たされている。これは従来 of 先行研究には見られない独自の新しい知見である。

2) 従来ベンヤミンの“*Naturgeschichte*”に関しては、それが「自然」と「歴史」を特異な形で組み合わせた概念として使用されていることが指摘されてきたが、長濱氏はこれをタイトルにある“*Trauerspiel*”にも適用し、「哀悼」と「遊戯」の特異な組み合わせとして理解する。そして、その「哀悼遊戯」を『ドイツ哀悼遊戯の根源』の終わりに登場するアダムとイヴの姿にまでたどり、そもそも『ドイツ哀悼遊戯の根源』という著作自体がベンヤミン自身による「哀悼遊戯」の実践である、と論じている。この「哀悼遊戯」に関わる一連の長濱氏の指摘は先行研究にはない新たな知見である。

3) 長濱氏は本論文の終章で、『ドイツ哀悼遊戯の根源』の巻頭に置かれている「認識批判序説」の第一次草稿と決定稿を比較して、第一草稿では中心的な位置にあった「啓示」の概念が決定稿では削除され、代わって「星座」の概念が登場することを指摘し、ベンヤミンの思想的な発展におけるその意味を明らかにしている。この点も、先行研究にはない新たな知見である。

審査基準6：その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

上記の新知見を裏付ける必要にして十分な議論と実証が展開されていることが審査委員会によって確認された。

審査基準7：当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

上記のように、長濱氏の論文は、ベンヤミンの主著『ドイツ哀悼遊戯の根源』を新たな知見にもとづいて総体として把握するユニークな試みであり、『ドイツ哀悼遊戯の根源』はもとより、ベンヤミンの思想的発展を理解するうえでも、新たな地平を切り開く独創性を備えていることが、審査委員会によって確認された。

以上を総合して、長濱氏の論文は、博士（人間科学）学位論文として必要十分な内容を備えており、学位を授与するに値するものであると審査委員会は判断した。

